

古文書の紹介(4)

桜田門外の変書簡

「御首さへ切取候…」 佐賀藩の情報網

今回は、平成17年に本館の古文書調査で発見された書簡を紹介します。

【桜田門外の変書簡】^{おつてがき}・本文、追書[黒成6・7-6-43-4 16.0×173.0cm]

個人蔵(寄託先:本館)

・別紙[黒成2-6-6 15.9×64.8cm]。

桜田門外の変は、安政7年(1860)3月3日(陽暦3月24日)、水戸・薩摩の十八士が時の大老井伊直弼の行列を江戸城桜田門(東京都千代田区)で襲撃した事件です。

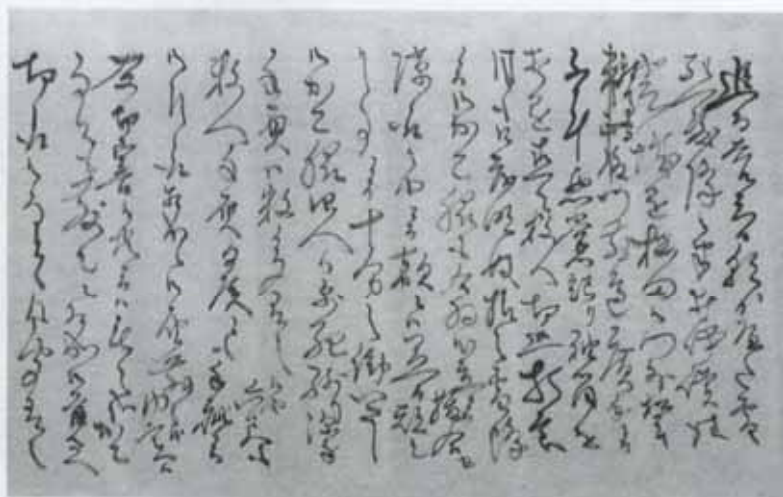
この書簡の差出人は成富作兵衛(良左衛門 種長寛政9年(1797)~文久2年(1861))で、本文、追書、別紙と3つの部分に分けられます。宛先は子供の成富弥兵衛(弥六兵衛 種武。佐賀在住)で、日付は「三月十日」となっており、桜田門外の変から1週間後に書かれたことが分かります。作兵衛は、佐賀藩の御側頭で、この事件があった時は江戸の佐賀藩屋敷に勤めていました。

井伊直弼の屋敷と鍋島直正の屋敷とは1キロほどの距離でした。

本文には、佐賀在住の家族を気遣う作兵衛の気持ちや江戸での様子が綴られています。

続く追書には、桜田門外で起きた井伊直弼襲撃事件の風聞が具体的に述べられています。本文が約30行であるのに対し、追書はその倍の60行を越えます。

この書簡では、井伊が襲撃された日の天候と、その場面を目撃した者からもたらされた情報が次のように述べられています。以下「追書」の部分を紹介합니다。



追書去ル三日朝よりへた雪
烈敷降候半、井伊侯様
登城懸桜田門外、松平
対馬守
直正殿門前邊廣手^二、
不計悪黨起り袖筒を
打懸直ニ数入切込、折節
目も口も明ぬ様之雪降
^二御かこ脇も合羽出立^三抜合七
際取候由^二、敵^三兼期^シ
候^二十分之働いたし、
御かこ脇四人か則死、残り深手
手負^ハ数多有之候由、六尺も
数人手負同候^ニも手垢^二
御引取相成候届前之由、内實^ハ
及切害候共^二無^三之哉、かこ
なども散々ニ相成、御首さへ
切取候など、風聞有之

このように、激しい「べた雪」のため井伊の周りを警護する士たちが刀を思うように抜けなかった状況が分かります。

また、井伊直弼は桜田門外の変で暗殺されていましたが、幕命により死亡は隠され、井伊家では喪を隠していました。しかし、事件の1週間後には「御首さへ切取」られたという「風聞」が既にあつたことが分かる貴重な資料です。

最後になりましたが、貴重な資料を大切に守って来られた関係の皆様、この場を借りてお礼申し上げます。